昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成15年8月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.381

2003 AUG

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN　HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1．期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2．募集人員：10名程度
3．負担金：75万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．申込〆切：11月30日（定員になり次第〆切）
6．その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰（北峰）を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1．期間：2004年7月22日～8月27日（37日間）
2．募集人員：10名程度
3．負担金：85万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．〆切：定員になり次第
6．その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

ヒンドゥ・クシュ山脈最高峰テリッチ・ミール（7,706m）を登り高度を稼ぐと眼下にディル・ゴル・ゾム（6,778m）が望める。更に後方にはアフガニスタン、ヒンドゥ・クシュの山々が広がり、その中で一際大きな山はコー・イ・バンダガー（6,843m）

（文・写真：野沢井　歩）

ヒマラヤ No. 381

1．新連載　日本ヒマラヤニスト名鑑
4．ロー・マンタンの空、遥かなり（11）　高橋　照
10．ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
12．カラコルム・パスー（7,478m）登山計画
16．雲南省登山の和文参考資料一覧（1979年開放以後のもの）
17．平成15年度　日本ヒマラヤ協会通常総会報告
24．寸感・事務局日誌

新連載

日本ヒマラヤニスト名鑑

エヴェレスト初登頂50周年の記念行事も一段落した。ネパールは、5月29日付けで新たに50座を開放すると発表した。これが50周年の落とし子だとするなら、50周年記念も登山者には多少お零れがあったと言うべきか。

さて、その最高峰の年齢競争や、スピード競争の報道には興味がないが、先月号で紹介したハリシュ・カパディア氏に贈られた英国王立地理学協会のゴールド・メダル受賞者を紹介するにあたって、非力な私には不明な人がいたので図書館で人名事典類を調べた。ところが当然と言うべきか、登山・探検の分野で載っている人は極端に少ないのである。

日本では登山・探検の分野がマイナーなことは十分承知はしていたが、世界のレベルでも低いのには正直驚き寂しかった。人名事典類の中で音楽に代表される芸術はそれなりの地位を得ているのに対して、文化の一端を占める冒険・探検・登山は何故認知されないのだろうか。その責任の一端はやはり行為者である私たち当事者の長年にわたる怠慢にもありそうだ。

とは言っても登山・探検・冒険の全ての分野について纏めることは、ＨＡＪは適任でない。されど誰かがとの思いも捨て切れない。

そこで日本人とヒマラヤに限定した人名事典なら、スタッフが汗を掻いてＨＡＪでも可能であろうと判断し、ＨＡＪ内でかなり昔から燻り続けている「日本のヒマラヤニスト」の事跡を残すという声に応えるために平成15年度の事業計画に組み入れることにした。

折しも今年度から『総会時に機関誌ヒマラヤの編集会議』を行うことになっていたので、その席で［仮称「日本ヒマラヤニスト名鑑」］発行準備着手として、当分の間、私が担当して「ヒマラヤ」に連載することとなった。

ヒマラヤ登山記録の整理に当たっては、私が提案している「高所登山」と「高所遠足」の区分を明確にしていくつもりではあるが、この「名鑑」に収録する人々は、その区分に拘ることなく、20世紀に花開いた「ヒマラヤ登山」に係わった人々を網羅し後世に残したい、との観点から、一定条件を満たすヒマラヤ登山者を収録する予定である。その一定条件の線引きが困難であることは承知している。何を残すのか、残したらいいのか、その辺の論議も含めて読者からの提案も参考に進めていきたいと思っているので、関心の有る方のご協力をお願いしたい。

（文責：山森欣一）

山田昇（YAMADA Noboru） 1950.2.9～1989.2.24

群馬県沼田市生れ。長兄・豊の影響で登山を始め、1966年沼田高校山岳部に入り本格的な登山開始。高校卒業と同時に沼田山岳会に入会。谷川岳など岩壁登攀を中心に登る。69年上京し山学同志会に入会するが一年程で退会。72年、小暮勝義、八木原圀明らが主宰する群馬海外登山研究会に入会しヒマラヤ登山を目指す。75年には群馬岳連がカラコルムに派遣した偵察隊のメンバーに選ばれラトック山群を一周した。本格的なヒマラヤ登山は、78年の群馬岳連のダウラギリⅠ峰南東稜。二度の遭難で４名を失うという壮絶な登山が高所登山の初体験となり二次隊で登頂。80年からは年２～３回のヒマラヤ登山を実践。そのほとんどが困難への挑戦という驚くべきものであり、派遣母体も群馬岳連だけでなく、ＨＡＪ、カモシカ同人、ＪＡＣと複数にまたがっているが、そのことが山田の人柄のよさをあらわす証明ともなっている。80年（春・ＨＡＪ）カンチェンジュンガ偵察、南峰の7,650mに達する。（秋・ＨＡＪ）インド、ケダルナート・ドーム（6,831m）副隊長、登頂。81年（春・ＨＡＪ）カンチェンジュンガ～ヤルン・カン（8,505m）の縦走を目指し、主峰側縦走隊員に選ばれ登頂するも縦走は時間切れのため断念。（秋・

ＨＡＪ）ネパールとの合同でランタン・リ（7,205m）登攀隊長、初登頂。（冬・ＨＡＪ）ナンダ・カート捜索、六千メートルの高みでゾンデ棒を振るった。82年（秋・カモシカ）ダウラギリＩの北西稜（梨）初登攀。八千メートル峰で二つの新ルートを登るという快挙を達成。（冬・ＨＡＪ）マナスル隊長、登山初日にクレバスに転落し登山活動から離脱。帰国後入院。83年（秋・カモシカ）ローツェ登攀隊長、日本人初登頂に成功。（冬・カモシカ）サガルマータ登攀隊長、冬期第三登に成功。84年（夏・ＨＡＪ）インドとの合同登山隊だけに許可されたマモストン・カンリ（7,526m）副隊長、初登頂。（冬・群馬）アンナプルナＩ南壁登攀隊長、落石を受け大雪に見舞われ撤退。85年（夏・ＨＡＪ）Ｋ２副隊長、無酸素登頂。Ｋ２登頂によって山田は世界で初めて四大峰（エヴェレスト、Ｋ２、カンチェンジュンガ、ローツェ）に登頂するという快挙を成し遂げた。（秋・植村撮影）サガルマータ無酸素登頂。（冬・カモシカ）マナスル隊長、冬期第二登を斎藤安平と二人でアルパイン・スタイルによって成功させ、同時に年間三つの八千メートル峰登頂というハットトリックを完成させた。86年（夏・ＨＡＪ）ポーランドのヴォイチェフ・クルティカと組んで斎藤安平、吉田憲司と共に隊長としてカラコルムの鋭峰トランゴ・ネームレスタワー（6,239m）に挑戦するも、不和が生じて撤退。（冬・カモシカ）マカルー隊長として、斎藤安平と二人で南東稜を攻めたが7,500mで敗退。87年（春）イエティ捜索で行方不明となった鈴木紀夫の消息を求めて斎藤安平とダウラギリⅣ（7,661m）ＢＣ付近を捜索するも手掛かりなし。（冬・群馬）アンナプルナＩ南壁登攀隊長、冬期初登攀。しかし下降中小林俊之、斎藤安平が相次いで滑落、行方不明となる。無二のパートナー斎藤の死は山田に大きな衝撃を与えた。88年（春・ＪＡＣ）中国、ネパール、日本の三国合同登山隊に参加。北稜を登り南東稜を下りエヴェレストを初縦断。パスポートを持参した正式な国境越え登山は世界初。（秋・ＨＡＪ）シシャパンマとチョー・オユーを隊長として連続登頂。後者はアルパイン・スタイル。これで二度目のハットトリックを完成させた。これが山田最後のヒマラヤ登山となった。87年冬アンナプルナ南壁を登った後、八千メートル14座登頂を決意し、スポンサーも決まったが折しもパキスタン政府は、八千メートル峰については、一人、１シーズン１座と規制していたため、特例措置を要請し折衝中に、五大陸最高峰冬期登頂完遂を目指しマッキンリーに挑戦中、小松幸三、三枝照雄と共に遭難死亡した。尚、88年にアコンカグァ、キリマンジャロ、89年にモンブランの冬期登頂を行い、マッキンリーの後にはエリブルースに向かう予定であった。エヴェレストの冬期登頂は83年に済ませていた。また、88年夏にはマッキンリーＢＣ（4,300m）から頂上まで５時間20分で登頂、１時間40分で下降するという記録的スピード登山を実践していた。遺稿・追悼集に「白き山河の旅人」（2003年）がある。

加藤保男（KATO Yasuo） 1949.3.6～1982.12.27
埼玉県さいたま市（旧大宮市）生れ。日大文理学部体育学科卒。兄・滝男の影響で登山を始める。66年夏、前穂高岳四峰で初めて岩登りを経験し、68年頃滝男が創立したＪＥＣＣへ入会。穂高岳屏風岩、下又白のルート開拓を経て、69年（夏）ヨーロッパ・アルプスへ。チマ・グランデ北壁登攀でアルプスの厳しい洗礼を受け、それをバネに滝男、今井通子、根岸知らとアイガー北壁にダイレクトルートを開拓、一躍脚光を浴びた。71年（夏）滝男と二人でベッターホルン北壁にダイレクトルート開拓。72年（冬）グランド・ジョラス北壁中央クーロアール初登攀。（夏）マッターホルン北壁登攀。73年（秋・ＲＣＣⅡ）石黒久と南東稜からエヴェレスト秋期初登頂に成功。しかし、帰路8,650m付近でビバークとなり生還。帰国後、八ヵ月におよぶ入院生活。両足指、右手中指、薬指、小指の第一関節から切断。75年（夏）マッターホルンをヘルンリ稜から登頂。76年（夏・ＪＡＣ）インド、ナンダ・デヴィ（7,816m）縦走隊に参加、ルート工作に活躍し縦走を成功させ加藤も主峰に登頂した。78年（秋・イエティ）清水清二と隊長としてマナスルに挑戦するも深雪に阻まれ八千メートルで敗退。80年（春・ＪＡＣ）開放されたばかりのチョモランマに登攀隊長で参加、北稜から最後は単独登頂となったが、この時も帰路8,750m

でビバークとなった。この登頂で加藤は世界最高峰を南北から初めて登った男となった。ちなみに二番目はラインホルト・メスナーで加藤に遅れること109日であった。81年（秋・イエティ）隊長としてマナスルに尾崎隆、富田雅昭と少人数隊で挑戦し登頂。鶴のヒマラヤ越えの撮影に成功し話題となる。82年（冬・イエティ）隊長としてサガルマータ南東稜から最後は単独で冬期第二登に成功。この登頂で加藤はシェルパのアン・リタに次いで世界最高峰三度登頂の栄誉に輝いた。しかし、下降中に南峰（8,750m）で待機していた小林利明とビバークとなり、そのまま行方不明となった。こうして加藤は三度の世界最高峰登頂の帰路その都度ビバークするという壮絶な挑戦となったのであるが、最後は遂に生還できなかったのである。著書に「雪煙をめざして」（昭和57年）、遺稿・追悼集に「加藤保男追想集」（1985年）がある。フランスのグループ・ド・オート・モンタニュ（GHM）会員。

高見和成（TAKAMI Kazushige）

1945.5.24～1998.2.22

愛媛県越智郡波方町生れ。1964年東洋パルプに入社してから登山を始める。67年広島山の会入会。68年、唐沢岳幕岩正面壁広島ルート初登攀、69年、同左岩壁に森栄とボルトなしのフリーのルートを完成させ一躍脚光を浴びる。同年夏、ヨーロッパ・アルプスでグランド・ジョラス北壁、ドリュ西壁＆ボナッティ稜、マッターホルン北壁、グラン・カピュサン東壁などを登攀。70年、唐沢岳幕岩正面壁広島ルート冬期初登攀。72年、奥鐘山西壁に近藤邦彦とルート開拓。72年冬、黒部・大タテガビン南東壁登攀。73年冬、奥鐘山西壁京都ルート登攀。73年（秋・RCCⅡ）サガルマータ南西壁8,050mに到達。74年夏カラコルム、ウルタル（7,388m）偵察。75年（夏・広島）カラコルム、カンピレ・ディオール（7,168m）登攀隊長として初登頂。76年（夏・JAC）インド、ナンダ・デヴィ（7,816m）の東峰（7,434m）から主峰に長谷川良典と初縦走。1979年（夏・広島）カラコルム、ラトックⅢ（6,949m）登攀隊長として岩壁で名高い山を初登頂。（秋・JAC）チョモランマ偵察、北西壁6,500mまで到達。80年（春・JAC）チョモランマ北西壁8,450mに到達。1982年（夏・日山協）チョゴリ（K2）登攀隊長として参加、北稜を無酸素登頂。91年（秋・JAC）ナムチャ・バルワ（7,782m）登攀隊長としてロックバンドのルート工作に活躍。アタックは7,460mで中止となる。92年春、広島山の会の先輩である加藤武三の詩画集「続焚火」を没後20年に合わせて刊行。その紐をナムチャ・バルワの山麓から採取した「大黄」で制作し話題となる。93年1月31日、大山墓場尾根登攀終了後、下山中、雪崩を誘発し遭難するも奇跡の生還を果たす。98年2月22日、大山天狗沢を森田恭充と登攀中、アンザイレンしたまま滑落し二人とも死亡。著書に「雪の谷　山の声」（1994年）、遺稿・追悼集に「山毛欅林より」（1999年）がある。

藤倉和美（FUJIKURA Kazumi）

1950.3.3～1981.9.28

福島県福島市生れ。1965年、県立福島工業高校に入学。山岳部に籍を置きここから登山を始める。68年「雪と岩の会」入会。ここで高校山岳部時代からの先輩・尾形好雄の薫陶を受ける。谷川岳、穂高岳、甲斐駒ヶ岳の四季の岩登りなどはもとより、北ア、南ア、越後の山々で積雪期登山を実践。1974年（春・雪と岩）ネパール、ツクチェ・ピーク（6,920m）が初めてのヒマラヤ登山となった。4名の少人数で登頂に成功。隣接するタパ・ピーク（6,012m）にも登頂。76年夏、ネパール警察のナショナルチームが挑戦するツクチェ・ピーク登山隊のコーチとして招かれ、アドヴァイスのため訪ネ。登山隊は登頂に成功し記念切手も発行された。78年（春・雪と岩）ネパール、ヒマルチュリ（7,893m）副隊長として参加、宮崎久夫、田村成典と未踏の南西壁から主峰の第二登に成功した。79年、唐沢岳幕岩正面壁山嶺第二ルート冬期第二登。81年（春・HAJ）カンチェンジュンガの主峰側縦走隊員として主峰に登頂するも時間切れのため縦走は断念した。81年（秋・HAJ）インド、ナンダ・カート（6,611m）に副隊長として参加。第二キャンプが雪崩に襲われ6名の仲間と共に行方不明となった。モンスターとの異名を持つ。遺稿・追悼集に「神々の寝所に召されて」（昭和58年）がある。

ロー・マンタンの空、遥かなり(12)

カリガンダキ左岸の地図の空白部を行く

ツォーナムから大峭壁を越えて

高橋　照

本日通過予定の尾根筋を地図で追って行くと、ツォーナムより7～800メートル急坂を登り切ると、あとは平な起伏の稜線が北東に延びていることが判った。しかし、この辺の地形を明確に記載した地図は今のところない。稜線は大体3,700～3,800メートル位の高度を保っているようであるが、ところどころ4,300～4,400メートルのところもあるようであった。土地のボテ達はタンゲ村まで一日あれば行けるといっているが、重い荷物のポーター達を連れてのキャラバンでは至難のわざであった。裸同様のポカラ・ポーターが稜線で露営するとしたら一体どうなるだろうか。当然四千メーター以上では天候が悪くなれば降雪もあることだろう。

「リエゾンに責任負わしとけばいいよ」と私が口に出した時、菊地君は、

「とんでもない。ポーターにもしものことがあったら、いくらリエゾンの責任でも困るのは私達ですよ。もし凍死者でも出したら、その保障はリエゾンでなくて、われわれが払うんですからね。そうすりゃ、こんな貧乏登山隊は一発で遠征を中止しなくてはなりませんからね」。

正にその通りである。私は今日一日天候がくずれないことを願った。そして、全行程－多分一日に走破することは無理であった－中、水は一滴もない不毛の乾燥地帯の稜線を行かねばならないので、水筒には充分ナルシン・コーラの泥水を詰めた。

私が馬に振り分けになっている乗馬用の鞍に、弁当や水筒などを入れてくくりつけている時に、キショールがやって来た。隊員のほとんどは出発していたが、キショールとタシの二人のネパール・メンバーは未だツォーナムに残っていた。

「前のバッティの裏からカリガンダキまで道があるので、その道を戻ってチャングマの村に延びているこの尾根に取り付けば、稜線に出る道がみつかるそうです」といって、私に馬に乗るようにすすめた。稜線を見上げると、バッティのすぐ裏手からガラガラにくずれたガレの急斜面をゾプキョが二頭真直ぐに登って行くのが見えた。

「あんなところを上るんかね」すると、タシが、

「ヤクは馬と違って、急斜面を自分勝手に真直ぐ登る習性があるんです。馬だとなるべく傾斜をゆるく道をとるんですがね」

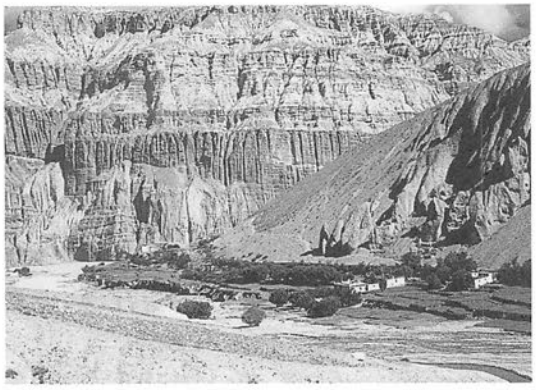
「じゃー。あれを登るんじゃないんだね」と私は一応ホッっとした。キショールが、

「さあ行きましょう」といって私の手綱をとった。

「君は馬のあつかいを知っているのかね」

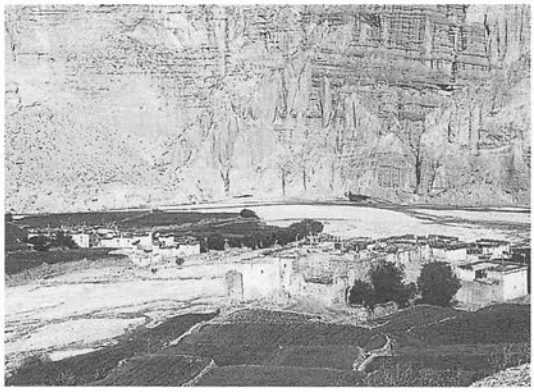
「なあーに。この辺の平らなところなら大丈夫ですよ。タシは、タンゲ村までのゾプキョの交渉を相談してから、すぐ後から来ますよ。ケサンさんも先に行ってしまったので、チベット語の話せる男は彼だけですからね」そういいながら手綱をとったキショールは、馬を引っ張ってくれた。ガラガラした礫の山腹をツォーナムより少し戻り、チャングマの集落が足下に見える頃、私は、

「もうこのへんから尾根に出た方がいいんじゃな



▲テの付近からツォーナムを振り返る

▼チュクサン3村とカリガンダキをふかん



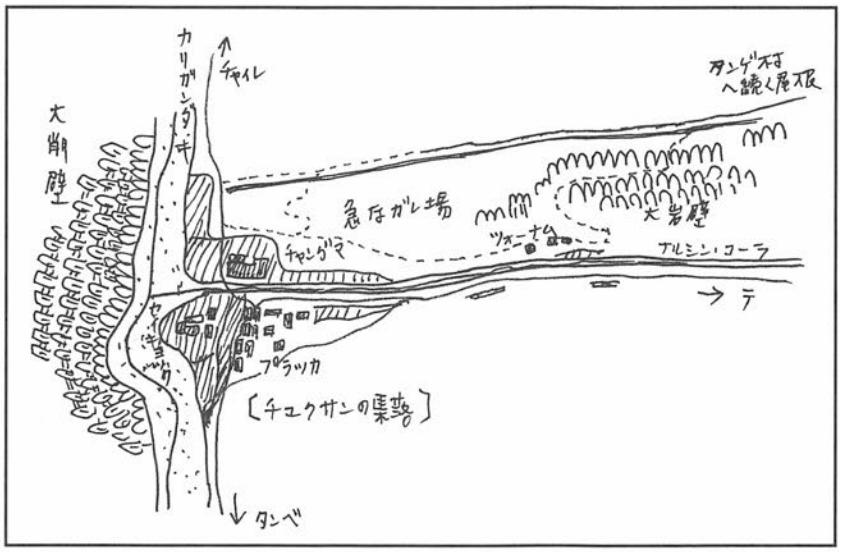
▼チュクサンのチャングマ村

いのかね。踏み跡はないが登れそうだよ」というと、キショールは、

「もう少し先に行きましょう。きっと道が見つかりますよ」そんな会話を二人で取りかわしている時、タシが後を追いかけて来て、

「一寸戻ったところに稜線に出られるところがあったよ」といって、キショールの持っている手綱を彼はとった。そしてガレ場を登り出したが、踏み跡はなかった。しかし不思議なことに、タシの歩くガレ場の石は流動しない。さすがはシェルパ族のタシである。子供の時からソロ・クンブの岩山を羊を追って駆け回っていた経験が身についていたのだろう。これにはキショールもおそれ入ったようであった。

瓦礫の稜線にそって道は真直ぐに突き上げていた。前方に、標識の旗竿を持ったポーターが、あえぎあえぎ登っている。彼は長物を持っているので、岩壁道を行くことが出来なかったのだろう。しばらく急登すると、右側のガレ場の急斜面を2、3人のポーターが上がって来た。大岩壁を乗り越したのだろうが、斜面の下は何も見えず、ストンと落ちているようだった。ここを乗り越したところは、台地になった平坦地があり、2、30人のポーターや隊員達が休んでいた。眼前には砂岩と礫岩の岩が立ちふさがり、このルート最大のヤマ場のようであった。足下にはいきなり、カリガンダキの広い河床がひろがり、チュクサンの三つの村も緑色のオアシスに取りかこまれて、小さく眺められた。カリガンダキの大峭壁も、ほとんど目の高さである。そして、その右のもう一つの大峭壁の中段には、岩を削った小径が望見された。チャイレよりサムマルに続く、ムスタン街道である。サムマルのオアシスは未だ見えてこないが、ギャーカの緑のオアシスが良く見下せた。5年前この道をタマン族のムスタンの警官と二人で下ったことが思い出されてなつかしかった。タマンの警官が口笛を吹きながら下りた道である。



台地よりは砂岩の間に道がくねくねと登っていて、その上部は礫の急な斜面が続いていた。タシが息も入れずに、グングン手綱を持って引張り上げた。礫岩の玉石ばかりの急斜面は止まることの

▼ガミー村とダッタン・ソバの花

全く出来ない急坂である。私は馬の髪をしっかりつかみ、腰を浮かして一気に駆け上った。途中、先程のゾプキョ二頭を追い越したが、このせまい礫の急な道なのでヒヤヒヤした。私はゾプキョの習性を知っているだけにこわかった。タシは自分の個人装備を背負ったまま、手綱を持って息を切らさず駆け上って行った。タシは強い、本当に強いとその時私は思った。

急な傾斜に堆積している、ボールのように丸い礫の上を行くので、不安定なことはこの上ない。馬もつまずいたら最後と思ってか、息をきらせながら、遮二無二休みなく登った。40分間の苦闘であった。

やっと傾斜が緩くなったと思われる頃、尾根上の一角、峠の肩ともいうべきところに着いた。既に10人近くのポーター達が休んでいた。馬を休ませなくてはと思い、私も馬から下りて休み、ツォーナム以来初めての煙草に火をつけた。うまかった。

右手にはドゥラギリ主峰とニルギリの北峰が目の高さに聳え立ち、その右にはドルポの山々が紺碧の空高く連なっていた。そして、足下にはテタング（テ）の集落と広い麦畑の緑が広がり、その奥はナルシン・コーラの嶮悪な涸谷が続いていた。カリガンダキの大峭壁も既に私達よりも遥かに低くなり、その奥にはチョム・ファック・カムバ・ケームの段々畑が望見できた。先程見えなかったサムマルの村もはるか下方に眺めることが出来た。この稜線の一角は、3,800メートルから4,000メートルぐらいの高さと判断された。一気に1,000メートルの高度をかせいだ訳である。

峠の肩では、3、40分も大休止してしまった。それより道はナルシン・コーラのボロボロにくずれた上部を少し行くと、真黒い泥の尾根を行くことになる。ムスタン地区全体は、その昔、海底がせり上がって出来たところなので、東ネパールに見るような岩山や岩場はない。海底の泥や砂で出来上がっている地形なので、独特の地形をしている。この附近全体が乾燥地帯であるため、雨による影響は少ないが、それでも残雪が解け始めると、いたる処に雨裂が出来て、稜線ですら、雨裂のため、深い溝が道をふさぎ、馬からしばしば下りなければならない。

ゆるやかな起伏の稜線には、まばらにカラガナ(Caragana)とエフェドラ(Ephedra)のトゲだらけの灌木が見渡すかぎりの斜面に広がっている。カラガナは黄色い花をつけるが、エフェドラは真赤な花である。このカラガナはムスタン地方だけではなく、ネパール全土の乾燥高山帯に発見することが出来る。

正午近く、カラガナのある平坦な尾根の広場で、先発隊の三笠と土谷が昼食を摂っていたので、私も弁当を食べることにした。カリガンダキの対岸には5年前に通ったムスタン街道が、河岸段丘の上や、樹林帯の間を水平に走っており、ベニ・バッティとおぼしきところも、ハッキリ望見することが出来た。そして水平道はギリンのオアシスにと続いており、その先の草原よりは、ニ・ラ（ニ峠）に続く、斜面に斜めにつけられた道が手に取るように見えた。そのうち、タシもキショールもやって来て、同じように弁当をひらき出した。

「ネエー。キショール。この真正面の樹林帯に水平道が見えるだろう。その右に谷が入っているだろう。その手前へんがベニ・バッティだよ」というと、

「そうそう。あのへんに確か、バッティが一軒ありましたね。ベニ・バッティっていうんですか？名前は知りませんでしたよ」キショールも数年前にムスタン入りをした記憶を思い出したようだ。

「小さな谷から右に樹林帯に道が登っているだろう。そして、しばらく水平の道が岩の間を縫って

いるね。そのずーっと右のグリーンの斜面がギリンの村だよ」

「そう、そう。あの広い緑の斜面は正しくギリンですよ。そうすると、その左上の方にバッティがあるはずですよ」

「ジャティ・バッティだよ。ほら上の方にニ・ラに向う右斜めに登っている道が見えるだろう。ジャティ・バッティはその下のところだよ。バッティは遠くて見えないけどね」

「じゃー。もう少しこの尾根道を行くとガミーの村が見えるでしょうね」

「多分見えると思うよ」二人の話は往時を思い出して尽きることがなかった。タシが

「バーバ、ロー・マンタンは見えますか」

「遠いんでまだ見えないけれど、今日中には見ることが出来るんじゃないかね。ホラ、あのムスタン・ヒマールの山すそに広い高原があるだろう。あの辺りがローだよ」

タシの若い眼は未知への好奇心にかがやき、私の指差す方向に目を見ひらいた。

カラガナの生えている広い尾根は、ゆるい起伏でまだ延々と続いていた。道ばたのところどころにポーター達が荷を下ろして、あえいでいた。一人のポーターが、

「サーブ。パーニー・ディノース（サーブ水を下さい）パーニー・ディノース」というと、2～3人のポーター達も一斉に手を差し出した。彼等は水筒を持っていないので、今朝ツォーナムで水を飲んだだけである。その上、炎天下の木陰の全くない尾根筋である。この乾燥地帯を重い荷物をかついでのキャラバンは正に重労働である。私はタシにいって、馬にくくりつけてある鞄から水筒を出すように言った。タシは、

「私の水はさっき、途中で全部ポーターに飲まれてしまいましたよ。バーバ、彼等に水を出してやると一っぺんになくなってしまいますよ。それでもいいんですか」

「俺は馬に乗っているので、水は必要ないから全部飲ましてしまっても良いよ」鞄から私の水筒を出したタシは、

「一口だけだよ。一口だけだよ」とポーター達にいった。最初のポーターは、一口どころかゴクゴク飲み始めた。それを見て附近に休んでいたポーター達が数人集まって来て、水筒の水はアッという間に空になってしまった。

それからの尾根筋は戦場を髣髴させるような光景を展開した。道のあちらこちらには、荷物をほうり出したポーター達が、乾きと空腹にあえいでいた。特に、朝食を出発時に食べていないポカラ・ポーターに多かった。強行軍と戦闘に疲れはて道ばたにバタバタと倒れている兵隊の間を、私は馬で巡察する隊長になったような錯覚に陥ってしまった。タシは、

「ジャウ・ジャウ（行け、行け）」と激しく励ましの言葉をあびせかけていた。

平らな尾根をしばらく進むと、稜線のかげに小さ雪田があった。十数人のポーター達が砂糖にたかる蟻のようにむらがっていた。残雪が融けて道に一条の溝を掘っていた。ポーター達はその堀の中に顔をつけて、泥水をむさぼるように飲んでいた。

尾根道は少し下りになり、その先には布を引い

▲尾根道を行く

▲延々とつながる稜線

◀尾根道よりドルポの山々を見る

た様に長い稜線になっていて、緩い登りとなり、かなり大きなピークに続いていた。そのピークが4300メートルのこの稜線の大体中間ぐらいの地点と思われた。右側はナルシン・コーラの深く切れ込んだ荒々しい涸谷が棚引く雲の中に続いていた。

先発の隊員の二人が路傍で待っていた。話しを聞くと、この先の山腹道がくずれて断道になっているので、ザイルでフィックスして来たそうである。馬は通れないのでこの上を尾根通しに行ってくれということだった。他の人も出来るなら上の尾根道を通った方が安全だという。私は馬に乗ったまま、上の急な尾根道を登った。稜線上の一ピークであった。ピークより下り始める頃、右側のナルシン・コーラの断崖を形成している砂岩が、雨裂谷になっている光景が見渡せた。小さな沢山の支稜がけずられ牙のような形の岩塊が無数に、まるで乱塔場のようにナルシン・コーラに向ってなぎ落ちていた。ＴＢＳの寺田さんが、

「うわー、これは凄い。ＮＨＫのシルク・ロードに出てくる雨裂の岩峯群より、この方が絶対に凄いぞ」といっていた。しかし、レコーダーを背負ったスタッフが来ないので録画撮りはあきらめたようだった。急な細い尾根道を下ると、再び広い山腹道に出る。尾根道はまだ果てしなく、緩い山稜の側面に水平に延びていた。とうとう私とタシが、キャラバンの最前線になったようだ。ポーター達は３時間以上は遅れていると思えた。

時計を見ると３時である。前面のダモダール・ヒマールの一角に鉛色の雲が棚引き、その中を水平に雷光が走ったと思うと、黒い雲の波頭が押し寄せてきてヒマールを覆ってしまった。そして、ヒマールには雷雪が降り出して来たようだった。タシは私に、

「４時までには泊まり場をさがしておかないと、この分では夜になってしまいますよ。途中であったデー村の二人のボテから聞いたのですが、この

▲テ村と麦畑を尾根道からふかんする

▼物凄い雨裂谷（ナルシン・コーラ）

先にゴート（牧草地）があって、そこには湧き水があるといっていました。いっぺん偵察して来ますから馬を貸して下さい」彼はそう言って私の馬にまたがり、自分の荷物を私のそばに置いて、一鞭あてて前方に走っていった。雷鳴が止み、空が少し明るくなった時、眼前にブリクティ山群と思われる山が見え出した、その前山だけしか顔を出さない。見ると緩い山稜は真白になっている。今の雷雨は雷雪だったのだ。4,500メートルの高さと思われる稜線には、その線を境として、どの山塊も白一色に覆われていた。3～40分程して、タシは戻って来た。

「この先馬で駆足で行って15分のところに、水場があり、その附近に遊牧民の天幕が一張り張ってありました。今晩の泊まり場はそこにしましょう。私はこれから馬で戻って隊長に報告してきます」と彼は私に一言いって、再び馬に鞭を当て、引返して行った。そして、小一時間後には戻ってきた。タシは私に向って、

「ここから馬で、駆足で15分、並足で30分、歩いて1時間。ポーターの足どりでは2時間はかかるでしょう。だからポーター達は現在地より1時間ぐらい後を歩いているので、7時までには全員到着できるでしょう」といった。再び私は馬上の人となり、タシと二人でタシのいう泊まり場に着いた。午後5時をちょっと廻っていた。この泊まり場は土地の人はパの遊牧地と呼んでいる。

泊まり場の下の方にはチョロチョロ出ている湧水があり、その流れを集めた水たまりが二つあった。そして、その下方の谷を一つへだてて、ヤクの毛で織った遊牧民の天幕が一つと、黒い山羊が二百頭ほど、石で造った囲いの中に蝟集していた。泊まり場は平坦地で、私達の隊の天幕を張るには、充分なだけの広さがあった。しかし、キャンプ予定の敷地内は、山羊の小さな丸い糞だらけで、地面が見えないくらい敷きつめられていた。

本隊は6時半頃に、そして最後のポーターは夜遅くなって9時頃、ナイケにおぶわれるようにして連れてこられた。キャンプ場の高度は4,200メートル、夜には霜がおり、薄氷が張った。

地域ニュース

《中国》

イエティ隊がチョモランマに登頂

イエティ同人がチョモランマに派遣した登山隊（雨宮節隊長ら14名）は、北稜通常ルートから5月20日、太河内宏幸（26）隊員が登頂。22日にも田中基喜（54）、泉田清幸（55）、高畠聡（37）3隊員が登頂した。

中国、アマチュア登山家がチョモランマ登頂

中国では、近年大学生を中心にアマチュア登山家がヒマラヤの高峰登山を開始し注目を集めているが、その流れは社会人である実業家にも波及しており、中国登山協会（ＣＭＡ）もこれらのアマチュア登山家の活動を全面的に支援している。

今年はチョモランマ初登頂50周年とあって、中国でも様々な報道がされている。八木原圀明氏が招かれて北京で中国人初登頂者の王富州氏と共にテレビ出演したのを始め、アマチュア登山家のチョモランマ挑戦をＣＭＡが全面的に支援し、その模様が5月11日～21日まで中央電視台によって連日、ＢＣから2時間も生中継された。そのアマチュア登山家が登頂した日には6時間も生中継するほどのフィーバー振りであった。今回の登山隊にはアマチュア登山家9名が参加。総隊長はＣＭＡの王勇峰交流部長、副隊長はＴＭＡのニマ・ツェリン副秘書長、登攀隊長はＣＭＡ羅申が務めた。

その他、ネパールのシェルパを18名雇用、ニマ・ツェリンが校長を務める「チベット登山訓練学校」生徒20名、中央電視台スタッフ80名、通信関係10名、新聞記者など、このプロジェクトだけで150名がＢＣに入った。

アマチュア登山家の登頂者は次のとおり。

5月21日

①梁群（女性・35歳）大学教師。2000年ユイチュ（6,179m）登頂、01年ムスターグ・アタ（7,546m）登頂。

②陳駿池（37歳）ＩＴ技師。99年ユイチュ、ムスターグ・アタ登頂、00年サンディン・カンサ（6,590m）登頂、01年チャンサンラモ（6,325m）登頂。

5月22日

③王石（52歳）会社社長。99年ユイチュ登頂、00年チャンツェ（7,543m）登頂、01年ムスターグ・アタ登頂、02年マッキンリー（6,194m）登頂。

④劉建（41歳）新聞記者。01年ムスターグ・アタ登頂、02年マッキンリー登頂。

なお、21日には、ニマ・ツェリン、アワン・ロブ（22）、タシ・ツェリン（23）、ワンスイ、ププ・トンジュ（22）、シャアバが登頂。22日にも、羅申が登頂している。

また、ププ・トンジュは、ニマ・ツェリンの生徒で昨年ＨＡＪのニンチン・カンサ登山隊に高所協力員として参加した。七千メートルの高度は未経験であった。今回のチョモランマは無酸素とのことである。

《アフガニスタン》

ノシャック（7,492m）に登山隊挑戦

イタリアに本部を置くマウンテン・ウィルダネスの支援を受けた「ミッション・オクサス」なる登山隊が、6月末から6週間の予定でアフガニスタンの最高峰ノシャック登頂に挑戦する。隊員は八千メートル峰13座登頂のステファニらイタリア、フランス、ドイツ、スロヴェニアから参加する予定。治安、対人地雷など多くの問題が残されている筈であるが、この挑戦が実れば、登山界にとっては最近にない朗報となるだろう。

Books

エベレスト50年の挑戦

エベレスト初登頂者であるテンジン・ノルゲイの息子ジャムリンは、1996年春ＩＭＡＸ隊で南東稜から登頂に成功した。そこに至るまでのジャムリンの心情が余すところなく書き綴られている。

アメリカに留学し生活し、仏教に対して懐疑的であったジャムリンが、一方では早くから父の登ったエヴェレストに登頂しなければならない、とい

う強迫観念に縛られていたことに運命を感じるし、その父の生き方を通して、仏教に帰依していく過程が興味深い。また、父ノルゲイの生きた時代のクーンブ地方や、父から聞いた当時のヒマラヤ登山が、ジャムリンの口から語られることで、私たちはヒマラヤ登山の進展の中で、シェルパの果たした役割をあらためて知ることができるし、さらにラマの高僧であるリンポチェがシェルパの世界でどのような位置を占めているのかを知ることもできる。そして、現代のシェルパたちは、経済的に苦しくても静かな環境の中で信仰に生きた時代と、客が溢れ返り学校に通う子供たちが多くなった豊かさの見返りとして、喧騒に包まれ信仰が薄らいでいく今のいずれを望んでいるのだろうかを考えさせられる。シェルパの手によって綴られた「エヴェレスト」本はノルゲイの「ヒマラヤの男」以来だという。ヒマラヤの地元民の目からみた、シェルパの世界、ラマの世界、ヒマラヤ登山の世界、1996年春の大量遭難に関する世界が綴られた好著であり一読を勧めたい。巻末に「日本人が挑んだエベレスト」として松浦輝夫、大蔵喜福、田部井淳子、貫田宗男、山田淳に対するインタビューと日本人登頂者一覧が収録されている。最近、ノルゲイの孫夫妻による「テンジン」に対する書評に『訳文はいただけない。本邦山岳翻訳史上まれにみる「珍作」である』とあったが、本書にも50周年に合わせて刊行されたようで、初歩的な校正ミスと思われる箇所が数多く見受けられ、画龍点晴を欠いたことは惜しまれる。　（山森欣一）

A５判変形　383頁　海津正彦訳　廣済堂

2003年６月14日刊　　2200円＋税

ヒマラヤから

キンヤン・キッシュ便り

アッサラーム・アレイクム　皆様お変わりありませんか。我々は５月28日予定通りジープ２台、トラクター２台で……（判別不能）30日予定より１日早くＢＣ予定地のブルランに着きました。まだ上部からの水が流れておらず、キンヤン氷河から汲んで運んだりしていたのですが、31日にはまるで我々の到着を待っていたかのように水も流れ始めました。

６月３日、キンヤン氷河対岸の西稜基部（といってもルンゼと岩稜が入り組んでいて、とても分かりにくい西稜下部ですが）に上部用の荷を集積し、いよいよ登攀開始！の筈でしたが、３日午後から天候が崩れ休養中です。皆元気で食欲もあり、ＢＣ周辺の大岩でボルダーを楽しむ者あり、岩石探しをする者あり、読書に勤しむ者ありです。３日横浜山岳会の小野氏が２ヵ月間のパキスタン・トレッキングの途中、我々のＢＣを訪ねてくださいましたので、このＦＡＸを託します。

（追記）

ここ数年、我々以外の隊が入山することの無かったキンヤン・キッシュ山群に、今年はどうしたことか①韓国隊（東稜～東峰は断念して、ポーランドルート～主峰との未確認情報あり）②無許可のフランス隊（パキスタン冒険財団とジョイントしたとの話もあるがルートその他不明。リーダー格は01年にハンス・カマランダーとＫ２に登ったと言っている）③我々の隊の３隊がいます。もっともＢＣも遥かに離れていて、顔を合わすこともないのですが、メジャーな8,000m峰に登山者が殺到する昨今、韓国隊に親しみを覚えます。我隊の連絡官が彼等のところに昨日から泊まりがけで遊びに行っています。（連絡官が帰り韓国隊はポーランド・ルートに転進しました）

2003.６.４ＢＣにて　同人パハール　飛田和夫

■財政支援〔30,000円〕天城敞彦
〔11,000円〕松舘正義

東京集会のお知らせ

日時　７月28日（月）午後７時～

内容　納涼とします。

場所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

ＨＡＪサマーキャンプ

カラコルム
パスー（7,478m）登山計画

◇ ご　挨　拶 ◇

日本ヒマラヤ協会（英文略称：ＨＡＪ）は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践するヒマラヤ愛好者約700名で構成する全国組織の任意団体であります。

本会は1967年の創立以来、インド、ネパール、パキスタン、アフガニスタン、ブータン、中国、カザフスタン、キルギス、タジキスタンなど広大なユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、この35年間に登山隊97隊・752名、踏査隊49隊・231名を派遣し、七千メートル峰９座の初登頂に成功しております。

ヒマラヤ登山熱が高まる中で、本会会員の中から「身近に仲間や良きアドバイザーがいないため、ヒマラヤ登山の夢を実現出来ない」との声が大きくなり、その人達から「休暇が比較的取り易い夏の時期」に、「ヒマラヤ登山を実践したい」との希望が寄せられるようになりました。

本会では、この声に応えるために、1989年から「サマー・キャンプ」を事業の一つに加え、インド・ヒマラヤで開始し、その舞台も中国、パキスタンへと広げ会員に好評を博して参りました。

本年は、中国、チベットのカンペンチン(7,281m)に目標を定め、隊員一同トレーニングと研究・準備を進めておりましたが、４月25日になり新型肺炎（中国肺炎ＳＡＲＳ）の蔓延を防御するため、チベットは入域が全面的に禁止されました。その後もその解除に期待しておりましたが、受入れ先である中国登山協会から正式に許可取り消しの通知がありました。

隊員は５月上旬に行われた合宿において、最悪の場合希望者でパキスタンに舞台を移してでもサマー・キャンプを実施したいと合意しておりました。

その転進先は、カラコルムの西部にありますバトゥラ山群のパスー(7,478m)であります。この山には東峰(7,295m)があり、それも視野に入れた登山活動を計画しております。

本会のサマー・キャンプは、全て結集した隊員による「高所登山」であり、今、流行の「高所遠足」ではありません。従って現地においても、隊員がルート工作・荷上げ・テント維持を行い登頂を目指します。

出発前から「目的地の変更」という予期せぬ試練がありましたが、もとより舞台の大自然は人知をはるかに超えたパワーを秘めております。これまで培った隊員一人一人の経験とＨＡＪの総力を上げて取り組み、細心の注意を払いかつ迅速な行動により所期の目的を達成する所存であります。

なにとぞ、この趣旨をご理解戴きまして、皆様の絶大なるご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2003年６月

日本ヒマラヤ協会　パスー峰登山隊
隊　長　　酒　井　國　光

◇ 計 画 の 概 要 ◇

１．隊の名称
　日本ヒマラヤ協会パスー登山隊　2003年
　（ＨＡＪ　Pasu Expedition 2003）

２．派遣母体
　日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）

３．目標の山
　パスー主峰（7,478m）［パキスタン回教共和国西部バトゥラ山群］

４．目　的
　＊パスー主峰及び周辺峰の登頂

＊山岳自然環境の保全運動（テイクイン、テイクアウトの実践）

＊日・パ友好登山交流

5．登山期間

2003年7月21日～8月25日（36日間）

6．隊の構成

酒井國光隊長以下9名

7．推進の組織

日本ヒマラヤ協会パスー登山隊実行委員会

会　　長：山森欣一（ＨＡＪ理事長）

委　員　長：野沢井歩（同専務理事）

副実行委員長：酒井國光（同会長、隊長）

実 行 委 員：八木原圀明、尾形好雄、名塚秀二、岩崎洋、中川裕、古関正雄、田辺治、林雅樹、睦好正治（以上同常務理事）

：登山隊隊員

8．隊の事務局（留守本部を兼ねる）

〒170-0013　東京都豊島区東池袋4丁目2番7号　萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会　☎　03－3988－8474

FAX　3988－8502

夜間：03－3680－2280　山森欣一

◇ 日 程 の 概 要 ◇

7月18日　先発隊　成田～イスラマバード

20日　本　隊　成田～イスラマバード

23日　イスラマバード～チラス（車）

24日　チラス～ギルギット　（車）

25日　ギルギット～パスー　（車）

26日～28日　パスー～ＢＣ（徒歩）

29日　休養（ＢＣ整理）

30日～8月19日　登山期間（21日間）

20日～22日　ＢＣ～パスー～ギルギット

23日　ギルギット～イスラマバード

25日　本隊帰国

29日　後発隊帰国

◇ 隊の構成（年齢は出発時）◇

氏名・生年月日・年齢　1）住所　2）勤務先

3）所属山岳会　4）海外登山歴

隊　長：酒井　國光（1939.4.　生）64歳

1）〒300　　茨城県筑波郡伊奈町

2）聖徳大学附属小学校

3）昭和山岳会

4）アメリカ、マッキンリー(6194m) 隊長　1979ヨーロッパ・アルプス（数座）隊長、1980ヨーロッパ・アルプス（数座）隊長　1983パキスタン、ビルチャール・ドバニ(6134m) 登攀隊長　1984中国、アムネマチンⅡ(6268m) 副隊長、登頂　1986アメリカ、ドラム(3662m) 隊長、登頂　1988パキスタン、ブロード・ピーク(8051m) 隊長、登頂　1989中国、シャラ・リ(6032m) 隊長代行　1991中国、シュエバオ・ディン(5588m) 隊長、登頂　1992中国、ダークーニャン(5355m) 隊長、登頂　1993中国、ムスターグ・アタ(7546m) 隊長、登頂　1994中国、ユイチュ(6179m) 隊長、登頂　1995インド、ヌン(7135m) 隊長　1998中国、ラモシェ(6070m) 隊長　1999中国、ユゥイ・フェン(4374m) 隊長　2001中国、ニンチン・カンサ(7206m) 隊長

副隊長：佐藤　英樹（1948.4.　生）55歳

1）〒001　　北海道札幌市

2）札幌医科大学病院課

3）札幌中央勤労者山岳会

4）1981ネパール、カータン(6792m) 偵察　1982ネパール、カータン(6792m) 初登頂　1989タジキスタン、コルジェネフスカヤ(7105m) 隊長、登頂　1991ネパール、アンナプルナⅠ(8091m)　1996中国、ムスターグ・アタ(7546m) 登頂　1998中国、チョム・カンリ(7048m) 副隊長、登頂　2001中国、ヤンラ・カンリ(7,429m)登攀隊長

登攀隊長：岩崎　洋（1960.2.生）43歳

1）〒791　　愛媛県温泉郡重信町

2）気象庁富士山測候所・調理

3）バーバリアンクラブ

4）1984インド、マモストン・カンリ(7526m) 登頂　1986中国、カルジャン(7216m) 初登頂　1990アルゼンチン、フイッツロイ(3441m) 登頂

＆アコンカグア(6959m) 登頂　1990ボリビア、イリマニ(6460m) ＆ワイナポトシ(6087m) 登頂 1993インド、ピラミッド・ピーク主峰(7123m) 初登頂＆スフィンクス(6824m) 登頂　1995パキスタン、ディル・ゴル・ゾム(6773m) ＆ティリッチ・ミール(7706m) 登頂　1995インド、サトパント(7075m) 登頂　1996パキスタン、ディラン(7257m) 登頂　1996中国、ムスターグ・アタ(7546m) 登頂　1997パキスタン、ブロード・ピーク(8,051m)登頂＆ガッシャーブルムⅠ(8068m) 1997中国、ムスターグ・アタ(7546m) 登頂 1998ネパール、サイパル(7031m) 登頂　1999パキスタン、スパンティーク(7027m) 登頂　1999中国、カバン(6717m) 、グナ・ラ(6902m) 登頂 ナムナニ(7694m) 北面初登攀西面下降　2000パキスタン、スパンティーク(7027m) 隊長、登頂 2000中国、クーラ・カンリⅠ(7,538m)　2001ネパール、アピ(7132m) 登頂　2002パキスタン、ガッシャーブルムⅠ(8068m) 隊長、登頂

隊　員：北條　治男 (1949.10.　生) 53歳

1）〒207　　東京都東大和市

2）八王子市立浅川中学校

3）スカーロイクラブ

4）1996中国、ムスターグ・アタ(7546m) 登頂

隊　員：桶川　和気夫 (1950.3.　生) 53歳

1）〒920　　石川県石川郡鶴来町

2）のじやコア店

3）金沢山岳会

4）1990インド、サトパント(7075m) 登頂　1994中国、ルンポ・カンリ(7,095m)　1998ネパール、マナスル(8163m)

隊　員：石川　龍彦 (1952.2.　生) 51歳

1）〒630　　奈良県生駒市

2）(有) エルドラド　インターナショナル

3）あな同人

4）1983キルギス、レーニン(7,134m)隊長、登頂 1985タジキスタン、イスモイル・ソモニ(7495m) ＆コルジェネフスカヤ(7105m) 隊長、登頂 1987アルゼンチン、アコンカグア(6959m) 隊長、登頂　1989インド、ヌン(7135m) 1996中国、ムスターグ・アタ(7546m) 副隊長、登頂　1997中国、ニンチン・カンサ(7206m) 登頂　1999アルゼンチン、アコンカグア(6959m) 隊長、登頂 1999中国、チョム・カンリ(7048m) 2000カザフスタン、ハン・テングリ(7010m) 隊長、登頂 2002アルゼンチン、アコンカグア(6959m) 隊長、登頂

隊　員：加藤　和美 (1953.2.　生) 50歳

1）〒494　　愛知県尾西市

2）一宮商業高校

3）嶺山岳会

4）1997中国、ニンチン・カンサ(7206m) 登頂 2001カザフスタン、ハン・テングリ(7010m) 登頂

隊　員：高橋　敏雄 (1958,10,　生) 44歳

1）〒989　　宮城県仙台市

2）東北高校

3）東北学院大学山岳部OB会

4）1986中国、チョー・アウイ(7354m) 登頂 1993中国、ムスターグ・アタ(7546m) 登頂 1995パキスタン、ナンガ・パルバット(8126m) 1997中国、ニンチン・カンサ(7206m) 登頂 2000パキスタン、スパンティーク(7027m) 登頂

隊　員：吉武　裕志 (1975,11,　生) 27歳

1）〒242　　神奈川県大和市

2）湘南測量設計事務所（電話）

3）やまくら同人

4）2000インド、ストック・カンリ(6153m) 登頂 2000ネパール、カラパタール(5545m)

◇　パスー登攀小史　◇

1）1974　全日本登山隊（新貝勲）　7,000mまで

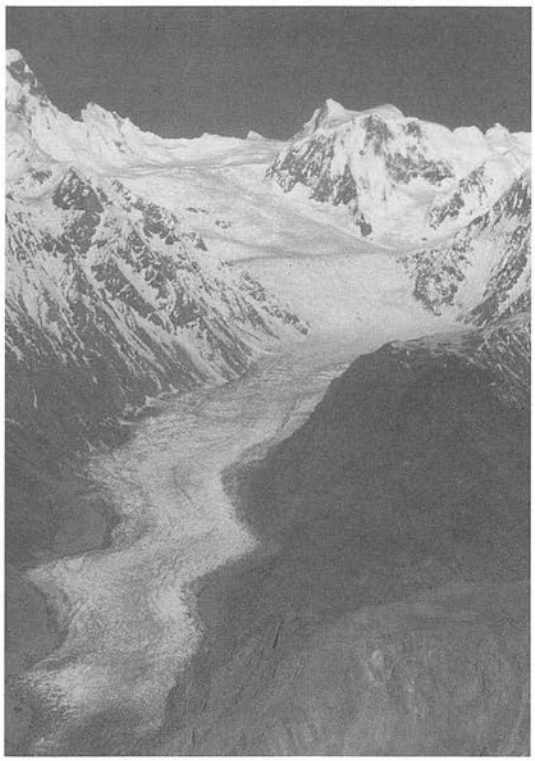
2）1978　防衛大学校隊（安藤千年）東峰初登頂

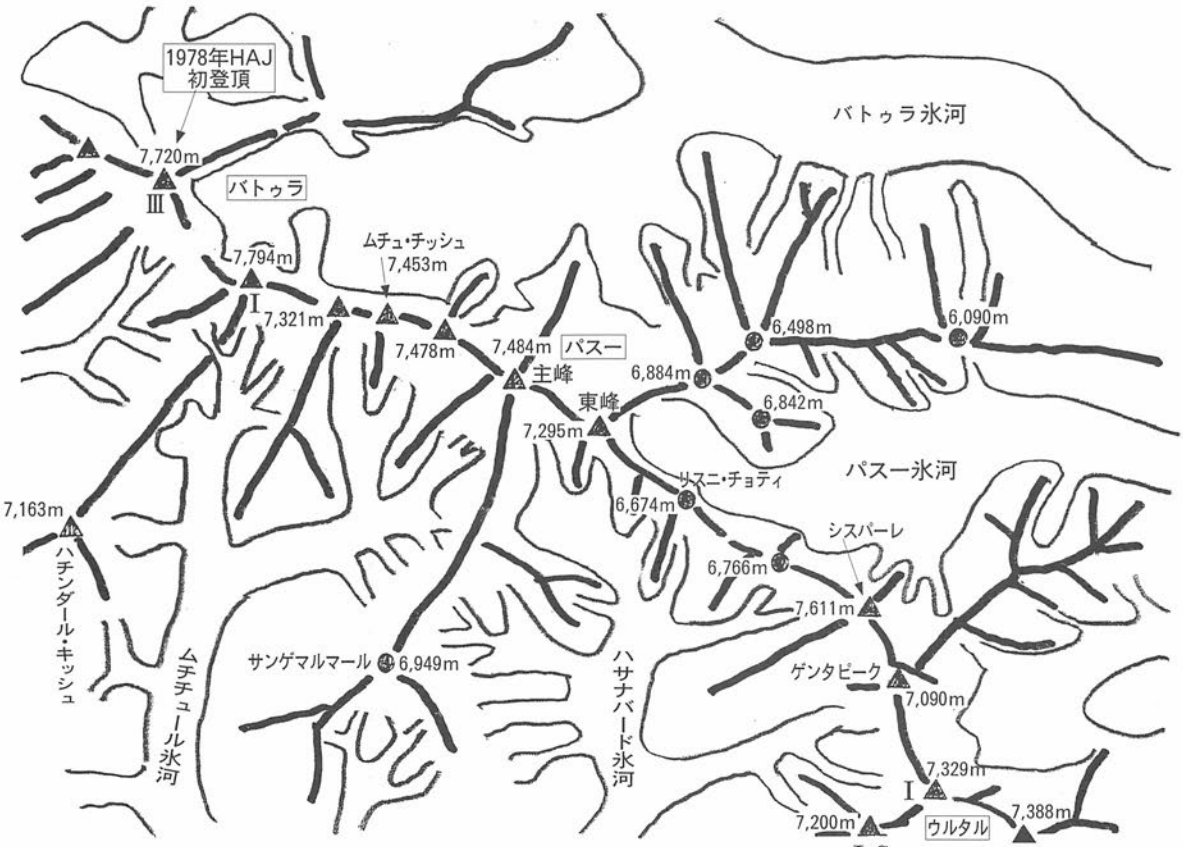
3）1982　諏訪山岳会隊（成田俊夫）7,000mまで

4）1985　福岡登高会隊（新貝勲）　東峰第二登

5）1994　ドイツ隊（M.ヴァルナー）主峰初登頂

▼手前にのびるパスー氷河の右奥が東峰と主峰





▲バトゥラ山群概念図

雲南省登山の和文参考資料一覧

（1979年開放以後のもの）

1）ユイロン（Yulong）5,596m

1．雲南の山旅－遥かな頂－「ヒマラヤ153号」1984年8月号
2．玉龍雪山(飛田和夫)「山と渓谷579号」1984年10月号
3．雲南の山旅　玉龍雪山 1984年（HAJ 雲南登山隊)「日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年9月15日
4．玉龍雪山登頂（エリック・パールマン）「岩と雪129号」1988年8月号
5．中国東南部玉竜雪山と麓の村「麗江」（青柳健二）「山と渓谷663号」1990年

2）メーリーシュエシャン（Moirigkawagarbo）6,740m

1．京大学士山岳会隊の中国・梅里雪山遭難「岳人525号」1991年3月号
2．中国、梅里雪山で遭難（ヤマケイ・ジャーナル）「山と渓谷669号」1991／4
3．梅里雪山に消えた17人（斉藤清明）「山と渓谷679号」1992年2月号
4．梅里雪山峰の登攀と遭難（酒井敏明）「山岳第86年」日本山岳会　1992年
5．梅里雪山事故調査報告書　京都大学学士山岳会　1992年1月
6．日中合同梅里雪山学術登山報告書　京都大学学士山岳会　1992年10月
7．日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊　1996年記録「時報№13」京都大学学士山岳会　1998年11月
8．梅里雪山巡礼路一周の旅上・中・下「岳人598号～600号」（中村保）1997年4月号～6月号
9．三たび中国、雲南省へ　梅里雪山から東チベットをうかがう(中村保)「ヒマラヤ267号」1994年2月号
10．シャングリラの名峰・梅里雪山（風見武秀）「岳人627号」1999年9月号
11．聖山カワカブに暮らす　梅里雪山（小林尚礼）「岳人634号」2000年4月号
12．聖山梅里雪山の麓から（小林尚礼）「山と渓谷785号」2000年12月号
13．梅里雪山への植物巡礼Ⅰ＆Ⅱ（吉田外司夫）「山と渓谷805号＆808号」2002年8月号＆2002年11月号

3）その他

1．チベットとその周辺の少数民族（山森欣一）納西族・イ族・白族「ヒマラヤ187号～188号、190号」1987年6、7、9
2．雲南省・悠江（サルウイン河）の旅（中村保）「ヒマラヤ236号」1991年7月
3．横断山脈の未踏の山々（中村保)「岳人597号」1997年3月号
4．“シャングリラ”に消えた能海寛（中村保）「山と渓谷759号」1998年10月号
5．“シャングリラ”今と昔　楽園をめぐる逸話と本家争い（中村保）「山と渓谷761号」1998年12月号
6．中国・雲南西北に消えた能海寛－チベット探検の先駆者殺害の新説を検証する（中村保）「岳人622号」1999年4月号
7．中国・雲南西北に消えた能海寛（中村保）「岳人622号」1999年4月号
8．少数民族を訪ねて　蒼山（中国）（川原高志）「岳人640号」2000年10月号
9．現代の“シャングリラ”をめぐる本家争い（中村保）「ヒマラヤ351号」2001年2月号
10．中国雲南の山々を歩く（藤井法道）「山690号」日本山岳会　2002年11月20日

平成15年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

日　時　平成15年5月24日（土）13時～14時

場　所　東京、東池袋　かんぽヘルスプラザ東京

出席者　本人出席：山森欣一、尾形好雄、岩崎洋、野沢井歩、古関正雄、睦好正治（以上理事）、保坂昭憲、中岡久（以上監事）、天城敞彦、今村裕隆、国沢鎮雄（以上評議員）、宮崎久夫（千葉）、石川和伴、森山安次（以上東京）、吉武裕志（神奈川）、以上本人出席14名、委任状提出者236名、合計出席者250名。定足数は会員数702名の三分の一234名。よって総会は成立した。

総会次第

1）野沢井歩専務理事の司会で定刻開会。総会に先立ち、山森理事長から挨拶を戴いた後、定款の規定では議長は理事長であるが、理事長が各議案説明に当たるため、出席者同意の上、議長席に尾形好雄常務理事が着席。議事録署名人に宮崎久夫、森山安次両会員を選んで議事に入った。

2）議事

議案第1号から第4号について別紙のとおり山森理事長から説明がなされて全て満場一致で承認された。理事会報告があり、平成15年度総会を終了した。

平成14年度　事業報告書

自　平成14年4月1日

至　平成15年3月31日

Ⅰ．定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

1．情報管理事業

1）会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導

年間100 件を越す電話・ＦＡＸによる照会と30件を越える事務所への来訪者へ情報提供と指導を実施した。

2）文献・資料のレファレンスサービス

一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則・地図・登山記録・登頂者記録等に関する希望者が多い。

2．ヒマラヤ登山情報管理機構（センター）設立事業

21世紀を展望して登山4団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）が平成10年3月に合意した「海外登山情報センター」構想の進展が見られないため、これを打開する方法について関係者と協議した。

Ⅱ．定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1．調査研究事業

1）高所登山における事故防止に関する調査研究

ヒマラヤ登山における日本隊の死亡遭難事故は、1968年から35年間連続して発生しており、これをストップさせるため、事故の実態をまとめ関係する会議で公表すると共に事故例について解説した。しかし、2002年は標高六千メートル以上の峰の死亡事故は、夏のカラコルムで1件発生し、1名が死亡した。

2）高所登山に対する意識調査

実施しなかった。

3）山岳の自然を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

本会が主催する「インド・ヒマラヤ会議」、「中国登山研究会」他、関係する会議にて「テイクイン、テイクアウト」について啓蒙した。

2．出版事業（研究報告）

1）日本ヒマラヤ協会創立35年記念誌「雪の住処35年の記録」を発刊した。（9月）

2）アルタイ山脈登山隊(99年) 報告書発行準備を行った。

3）日本隊ヒマラヤ登山50年の記録の発刊準備を行った。

4）神々の座「八千メートル峰データ（20世紀版)」の発行準備を行った。

3．関連学術事業

興味ある地域への派遣について研究した。

Ⅲ．定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1．高所登山事業

1）カラコルム連続登頂登山隊の派遣

6月10日～8月20日に岩崎洋隊長以下4名を派遣したが、当初予定のバルトロ・カンリ(7,300m)の許可を取得できなかったため、ガッシャーブルムⅠ(8,068m)に登山。8月5日に全員登頂に成功したが、帰路後藤隊員が高度障害になり救出活動に万全を期したため以後のチョゴリザ(7,668m)登山は中止した。なお、救出活動には後半から労山隊の応援を得て、スピーディな収容が実現した。

2）サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ(7,206m) 登山隊」の派遣

7月20日～8月25日に山森欣一隊長以下4名を派遣したが、6,700mで登頂を断念した。

3）直轄プロジェクトの推進

イ）平成15年度サマー・キャンプ「カンペンチン(7,281m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（酒井國光隊長以下10名）した。

ロ）平成14年度「シシャパンマ(8,027m)新ルート登山」

新ルートからの登頂の可能性を求めて隊員募集に着手したが翌年度に延期した。

ハ）平成15年度「サマー・キャンプ登山」

ニンチン・カンサ(7,206m)、カンペンチン(7,281m)、スパンティーク(7,027m)、サンデン・カンサ(6,590m)各峰の隊員募集に着手した。

ニ）ＨＡＪとして未着手の天山山脈登山隊派遣準備。

4）登山許可申請と取得

ヒマラヤ高所登山分野での現状を分析しつつ、ヒマラヤ登山の大衆化の分野の声に応えると共に、未知と困難への挑戦の育成を視野に入れ、魅力ある高峰について各国へ登山許可申請と打診を行った。

2．野外活動事業

1）日本ヒマラヤ協会創立35周年記念トレッキング隊を、ＴＨＩの全面的支援の下、10月13日～23日でネパール、ジョムソン～ムクチナートへ派遣。野沢井歩専務理事をリーダーに16名が参加して成功裡に終了した。

2）ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査・トレッキング隊の派遣について企画準備を行った。

Ⅳ．定款第4条第4項にもとづく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修、各種会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1．機関誌発行事業

「ヒマラヤ365号～376号」を毎月発行した。

2．出版事業

「パキスタン登山の手引き」発行準備を行った。

3．指導・啓蒙事業

1）日本ヒマラヤ会議の開催

各地の条件が整わず開催できなかった。

2）地域ヒマラヤ集会の開催

1月27日（大阪）29日（京都）でニマ・ツェリン氏を囲む会を開催。

3）定例会

毎月東京ルームで開催した。

4）第24回「インド・ヒマラヤ会議」の開催

1月26日東京にて開催。平成14年度隊の報告と情報交換を行った。参加者40名。

5）第11回「中国登山研究会」の開催

2月2日東京にて開催。チベット登山協

会副秘書長のニマ・ツェリン氏を迎えて、平成14年度隊の報告と情報交換を行った。参加者18名。

6）第8回「高所登山事故と環境対策研修会」の開催。

国際山岳年行事と競合し中止した。

7）壮行会

6月1日カラコルム隊（80名）と7月6日ニンチン・カンサ隊（35名）東京で開催。計画の発表と情報の伝達。

8）ＨＡＪ華甲望年会

12月14日東京で開催。本年度2隊の登山とトレッキング隊の報告を行い、本年中に還暦を迎えた会員4名を祝い、行く年を惜しみ来る年を語った。(54名)

Ｖ．定款第4条第5項にもとづく事業（その他前条の目的を達成するために必要と認める事業

1．国際交流事業

1）外国代表の招請

実施しなかった。

2）代表の派遣

実施しなかった。

3）各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

イ）中国登山協会代表団歓迎会（4月)、顔副主席、王勇峰部長ら5名。

ロ）ニマ・ツェリン氏歓迎会（1月）

2．国内関係団体との協調

1）ＪＡＣ幹事で、日山協、労山と「登山4団体三役懇談会」を行い情報交換と協議を行った。(7月)

2）「国際山岳年日本委員会」を日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＴ－Ｊ、学者と共同で運営、協力した。(通年)

3）その他、関連する山岳団体等と協力・情報交換を行った。

3．組織の整備

1）ホームページ開設の検討。

4．日本ヒマラヤ協会創立35周年記念行事の開催

1）9月28日（土）午後3時～5時『記念講演会・講師、尾形好雄常務理事』於：かんぽヘルスプラザ東京（参加者90名）

2）9月28日（土）午後6時～8時『記念祝賀会』於：同上（参加者102名）

3）創立35周年記念誌『雪の住処35年の記録』500部発行。

4）創立35周年記念トレッキングの実施（参加者16名）

5．その他

1）ＨＡＪ元常務理事山田昇氏の遺稿・追悼集発刊協力。(3月6日発刊)

2）機関誌「ヒマラヤ」印刷会社「中坪印刷」から「釣巻印刷」へ変更。

平成14年度収支決算書

自　平成14年4月1日

至　平成15年3月31日

Ｉ．一般会計

（収入の部）　（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増・減（△）
入会金収入		(300,000)	(150,000)	(△150,000)
	入会金収入	300,000	150,000	△150,000
会費収入		(8,500,000)	(6,388,800)	(△2,111,200)
	通常会員会費	5,500,000	4,888,800	△611,200
	終身会員会費	3,000,000	1,500,000	△1,500,000
事業収入		(6,250,000)	(9,579,760)	(3,329,760)
	野外活動事業	0	1,350,000	1,350,000
	高所登山事業	2,550,000	2,008,279	△541,721
	指導啓蒙事業	200,000	137,310	△62,690
	機関誌発行事業	900,000	1,071,001	171,001
	出版事業	500,000	390,170	△109,830
	国際交流事業	100,000	60,000	△40,000
	その他事業	2,000,000	4,563,000	2,563,000
雑収入		(300,000)	(910,228)	(610,228)
	雑収入	300,000	910,228	610,228
前期繰越		(△11,150,953)	(△11,150,953)	(0)
	前期繰越	△11,150,953	△11,150,953	0
合計		4,199,047	5,877,835	1,678,788

（収出の部）　　（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増・減（△）
管理費		(8,380,000)	(8,075,850)	(△304,150)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	通信運搬費	250,000	289,000	39,000
	電話費	150,000	124,339	△25,661
	消耗品文具費	50,000	41,977	△8,023
	営繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	650,000	446,404	△203,596
	図書費	50,000	44,050	△5,950
	賃借料	1,800,000	1,788,150	△11,850
	光熱水費	150,000	108,870	△41,130
	会議費	30,000	30,240	240
	広報費	200,000	182,700	△17,300
	雑費	50,000	20,120	△29,880
事業費		(6,500,000)	(9,853,297)	(3,353,297)
	野外活動費	0	0	0
	高所登山事業	2,450,000	3,023,838	573,838
	指導啓蒙事業	150,000	65,870	△84,130
	機関誌発行費	2,800,000	2,907,734	107,734
	出版事業費	300,000	9,600	△290,400
	国際交流事業	200,000	180,211	△19,789
	その他事業	600,000	3,666,044	3,066,044
次期繰越		(△10,680,953)	(△12,051,312)	(1,370,359)
	次期繰越	△10,680,953	△12,051,312	△1,370,359
合計		4,199,047	5,877,835	1,678,788

貸借対照表

（平成15年3月31日現在）

（単位：円）

借方	金額	貸方	金額
現金	20,441	未払い金	100,000
普通預金	451,920	預かり金	90,000
郵便振替	624,963	前受金	3,258,636
備品	450,000	借入金	10,850,000
登山装備	700,000	次期繰越金	△12,051,312
合計	2,247,324	合計	2,247,324

平成15年度　事業計画書

自　平成15年4月1日
至　平成16年3月31日

Ⅰ．定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及びこれらの利用希望者に対する便宜供与）

1．情報管理事業

1）会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

2）文献・資料のレファレンスサービス

2．ヒマラヤ登山情報管理機構（センター）設立事業

21世紀を展望して登山4団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）が平成10年3月に合意した「海外登山情報センター」の早期設立に向けて積極的に取り組む。

Ⅱ．定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1．調査研究事業

1）高所登山における事故防止に関する調査研究

2）高所登山に対する意識調査

3）山岳の自然を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

2．出版事業（研究報告）

1）アルタイ登山隊報告書の発行

2）神々の座「8000m峰のデータ（20世紀版）の発行

3）日本隊ヒマラヤ登山50年の記録の発行

4）仮称「日本ヒマラヤニスト名鑑」の発行準備に着手

3．関連学術事業

興味ある地域への派遣準備

Ⅲ．定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1．高所登山事業

1）サマー・キャンプ「カンペンチン(7,281

m)登山隊」の派遣

7月22日～8月28日（酒井國光隊長以下10名）尚、中国肺炎（SARS）の影響で4月25日、チベット入域が全面的に禁止されたため、登山隊員の協議によって希望者はパキスタンに転進することで合意した。

2）「チベット、ラシャール偵察登山隊」の派遣

10月中旬から1カ月程度。山森欣一隊長以下2名（許可取得次第実施）

3）直轄プロジェクトの推進

イ）平成16年度「シシャパンマ(8,027m)新ルート登山」

ロ）平成16年度サマー・キャプ「ニンチン・カンサ(7,206m)登山」

ハ）平成16年度サマー・キャンプ「スパンティーク(7,027m)登山」

ニ）平成16年度サマー・キャンプ「カンペンチン(7,281m)登山」

ホ）平成16年度サマー・キャンプ「サンデン・カンサ(6,590m)登山」

ヘ）ＨＡＪとして未着手の天山山脈登山隊派遣準備

4）登山許可申請と取得

ヒマラヤ高所登山分野での現状を分析しつつ、ヒマラヤ登山の大衆化の分野の声に応えると共に、未知と困難への挑戦の育成を視野に入れ、魅力ある高峰について各国へ登山許可申請を行う。

2．野外活動事業

1）日本ヒマラヤ協会創立40周年に実施する予定のカイラス・トレッキングの予行のために、当面ニンチン・カンサトレッキングを毎年実施する。

2）ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査・トレッキング隊の派遣準備を行う。

Ⅳ．定款第4条第4項にもとづく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修、各種会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1．機関誌発行事業

「ヒマラヤ377号～388号の発行。

2．指導・啓蒙事業

1）日本ヒマラヤ会議の開催

各理事と協議し条件が整い次第随時開催。

2）地域ヒマラヤ集会の開催

各評議員と協議し条件が整い次第随時開催。

3）定例会

毎月東京で開催。

4）「インド・ヒマラヤ会議」、「中国登山研究会」、「高所登山事故と環境対策研修会」を整理統合した啓蒙会議を模索する。

5）壮行会

東京で開催、計画の発表と情報の伝達。

6）ＨＡＪ華甲望年会

12月13日（土）東京で開催。本年度2隊の登山報告と本年中に還暦を迎える会員を祝い、行く年を惜しみ来る年を語る。

Ⅴ．定款第4条第5項にもとづく事業（その他前条の目的を達成するために必要と認める事業

1．国際交流事業

1）外国代表の招請

必要に応じて随時招請する。

2）代表の派遣

必要に応じて随時派遣する。

3）各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

来日したヒマラヤ登山関係者等と随時懇談。

2．国内関係団体との協調

1）労山幹事で、定着した日山協、労山、ＪＡＣと「登山4団体三役懇談会を行い情報交換と協議を行う。（担当：労山・7月）

2）上記4団体で「登山共済」について協議、実現を模索する。

3）その他、山岳関係団体等と協力・情報交換を行う。

3．組織の整備

1）執行体制の強化

2年後の役員改選期を目途に役員・評議員の若返りを考慮する。

本部近郊会員の協力を得て、非常勤スタッ

フを育成する。

2）会員拡大の強化

イ）一般会員の新規加入の一大キャンペーンの推進。

ロ）終身会員への移行を推進。

3）パソコン活用の推進。

4）機関誌「ヒマラヤ」の紙面強化の手法について検討する。

4．その他

平成15年度役員等名簿

（任期：平成16年度まで）

［顧　問］

柴田金之助（81）　岐阜
古原和美（80）　長野
遠藤　登（72）　東京
稲田定重（62）　福島

［会　長］

酒井國光（64）　茨木

［理事長］

山森欣一（59）　東京

［専務理事］

野沢井　歩（38）　神奈川

［常務理事］

八木原圀明（56）　群馬
尾形好雄（54）　東京
名塚秀二（48）　群馬
岩崎　洋（43）　愛媛
中川　裕（42）　東京
田辺　治（42）　愛知
古関正雄（42）　神奈川
林　雅樹（39）　京都
睦好正治（36）　東京

［理　事］

大内倫文（55）　北海道
戸谷　薫（55）　〃
名越　實（54）　広島

（理事14名の平均年齢＝47.4歳）

［監　事］

保坂昭憲（55）　福島
中岡　久（53）　埼玉

都道府県別会員数

（平成15年5月20日現在）

北海道	54(6)[15]	54(6)[15]
青森	7(3)[0]	
秋田	7(1)[0]	
岩手	7(1)[1]	
宮城	9(5)[1]	
山形	19(5)[0]	
福島	22(9)[3]	71(24)[5]
栃木	23(4)[3]	
群馬	31(15)[7]	
茨城	14(4)[0]	
埼玉	55(15)[9]	
千葉	27(8)[4]	
神奈川	63(13)[10]	213(59)[33]
東京	143(37)[27]	143(37)[27]
山梨	9(4)[0]	
新潟	3(0)[0]	
富山	7(1)[0]	
福井	3(0)[0]	
石川	6(3)[0]	
長野	18(6)[0]	46(14)[0]
静岡	6(0)[1]	
愛知	25(3)[1]	
岐阜	7(2)[1]	
三重	4(0)[0]	42(5)[3]
和歌山	2(0)[0]	
奈良	2(1)[0]	
滋賀	4(0)[1]	
京都	11(4)[1]	
大阪	21(3)[1]	
兵庫	16(1)[1]	56(9)[4]
岡山	4(1)[0]	
広島	13(5)[2]	
鳥取	5(0)[1]	
山口	5(2)[1]	
香川	3(1)[0]	
愛媛	3(3)[1]	
高知	5(1)[0]	
島根	0	
徳島	0	38(13)[5]
福岡	23(5)[0]	
佐賀	1(1)[0]	
大分	0	
長崎	5(2)[0]	
熊本	3(0)[0]	
宮崎	1(0)[0]	
鹿児島	1(0)[0]	
沖縄	0	34(8)[0]
国外会員	5(1)[3]	5(1)[3]
総計	702(176)[95]	
（前年度）	725(168)[96]	

＊（　）内は終身会員
［　］内は女性会員。

＊夫婦会員は35組
（その内19組は終身会員）。

平成15年度収支予算書

自　平成15年4月1日
至　平成16年3月31日

Ⅰ．一般会計

（収入の部）　（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増・減（△）
入会金収入		(300,000)	(300,000)	(0)
	入会金収入	300,000	300,000	0
会費収入		(8,000,000)	(8,500,000)	(△500,000)
	通常会員会費	5,000,000	5,500,000	△500,000
	終身会員会費	3,000,000	3,000,000	0
事業収入		(8,800,000)	(6,250,000)	(2,550,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	6,750,000	2,550,000	4.200,000
	指導啓蒙事業	100,000	200,000	△100,000
	機関誌発行事業	600,000	900,000	△300,000
	出版事業	250,000	500,000	△250,000
	国際交流事業	100,000	100,000	0
	その他事業	1,000,000	2,000,000	△1,000,000
雑収入		(300,000)	(300,000)	(0)
	雑収入	300,000	300,000	0
前期繰越		(△12,051,312)	(△11,150,953)	(△900,359)
	前期繰越	△12,051,312	△11,150,953	△900,359
合計		5,348,688	4,199,047	1,149,641

（支出の部）　（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増・減（△）
管理費		(8,200,000)	(8,380,000)	(△180,000)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	通信運搬費	250,000	250,000	0
	電話費	150,000	150,000	0
	消耗品文具費	50,000	50,000	0
	営繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	550,000	650,000	△100,000
	図書費	50,000	50,000	0
	賃借料	1,720,000	1,800,000	△80,000
	光熱水費	150,000	150,000	0
	会議費	30,000	30,000	0
	広報費	200,000	200,000	0
	雑費	50,000	50,000	0
事業費		(8,600,000)	(6,500,000)	(2,100,000)
	野外活動費	0	0	0
	高所登山事業	5,000,000	2,450,000	2,550,000
	指導啓蒙事業	50,000	150,000	△100,000
	機関誌発行費	2,800,000	2,800,000	0
	出版事業費	0	300,000	△300,000
	国際交流事業	50,000	200,000	△150,000
	その他事業	700,000	600,000	100,000
次期繰越		(△11,451,312)	(△10,680,953)	(△770,359)
	次期繰越	△11,451,312	△10,680,953	△770,359
合計		5,348,688	4,199,047	1,149,641

平成15年度評議員名簿（任期：平成16年度まで）

［評議員］

佐藤英樹（55）　北海道
辻野治子（46）　〃
松舘正義（59）　青森
丸山芳雄（64）　秋田
菅原和明（47）　山形
鈴木正典（41）　〃
志小田美弘（44）　宮城
小島守夫（63）　栃木
長　繁夫（52）　〃
粂川　章（51）　〃
後藤文明（38）　群馬
天城敞彦（56）　東京
青木　茂（48）　山梨
西嶋錬太郎（60）　石川
中村正勝（58）　長野
大西　保（61）　大阪
樋上嘉秀（58）　大阪
今村裕隆（44）　山口
国沢鎮雄（74）　高知
下田泰義（52）　長崎
大住恵子（45）　在パキスタン

（評議員21名の平均年齢＝53.1歳）

山岳文化学会大会演題募集

3月8日発足した「山岳文化学会（会長：斎藤一男）」では、11月29日～30日の予定で「第1回大会」を予定しており「演題」を一般から募集している。募集要項の請求は
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4-2-7　萬栄ビル501号　日本ヒマラヤ協会内
山岳文化学会大会係

ＨＡＪ販売書籍案内

書　　名	価　格	送　料
1．雪の住処35年の記録（ＨＡＪ創立35周年記念誌）	3，５００円	（４５０円）
2．天壇の山に挑む（ミニヤ・コンカ1991年隊）	2，５００円	（３１０円）
3．秀麗ヌン峰を攀じる（1991年隊）	2，０００円	（２４０円）
4．千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ（1984年隊）	1，０００円	（２４０円）
5．烈風の彼方へ、冬期マナスル（1982年隊）	1，５００円	（２４０円）
6．ナンダ・カート（1981年隊事故報告）	2，０００円	（３４０円）
7．聖地巡礼の旅（サトパント1990年隊）	2，０００円	（２４０円）
8．“神の河”ブラマプトラの激流を下る（1990～1991年）	2，５００円	（２４０円）
9．麗しき四川の夏　雪宝頂登頂（1991年隊）	1，０００円	（２４０円）
10．東部カラコルム	2，０００円	（２４０円）
11．ナマステ、サラスワティ（1992年隊）	2，０００円	（３１０円）
12．崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰（1993年隊）	1，０００円	（２４０円）
13．天女の山（玉虚峰）（1994年隊）	1，０００円	（２４０円）
14．ヒマラヤ、そして仲間達へ（ケダルナート・ドーム1980年隊）	1，５００円	（３１０円）
15．ルンポ・カンリ（1994年隊）	1，５００円	（２４０円）
16．中国登山の手引き（第５版）	3，０００円	（３４０円）
17．ニンチン・カンサ（1997年隊）	1，６００円	（２１０円）

■ 寸　感 ■

SARSは一段落したようだが転進を余儀なくされた隊も多かった。しかし、インドでは熱波で一千人規模の死者が出ている。自然には人間が抗しきれない破壊力がある。身につまされる。（山森）

事務局日誌（６月）

2日（月）　中国登山協会から今夏予定しているカンペンチン登山許可の取消し通知届く。サマーキャンプをカンペンチンからパキスタン・パスー峰へ変更する件、各隊員へ通知。

3日（火）　パスー（サマーキャンプ）登山隊壮行会案内出す。

4日（水）　中国登山協会へ費用返還請求出す。

5日（木）　ネパール政府５月29日付で新解禁峰50座発表。

9日（月）　ヒマラヤ380号発送

10日（火）　パキスタン航空７月21日、月曜日便フライトキャンセル　各隊員通知。

日本山岳会平山善吉会長新任挨拶で来会（藤本慶光理事、神崎忠男会員同行、山森理事長応対）

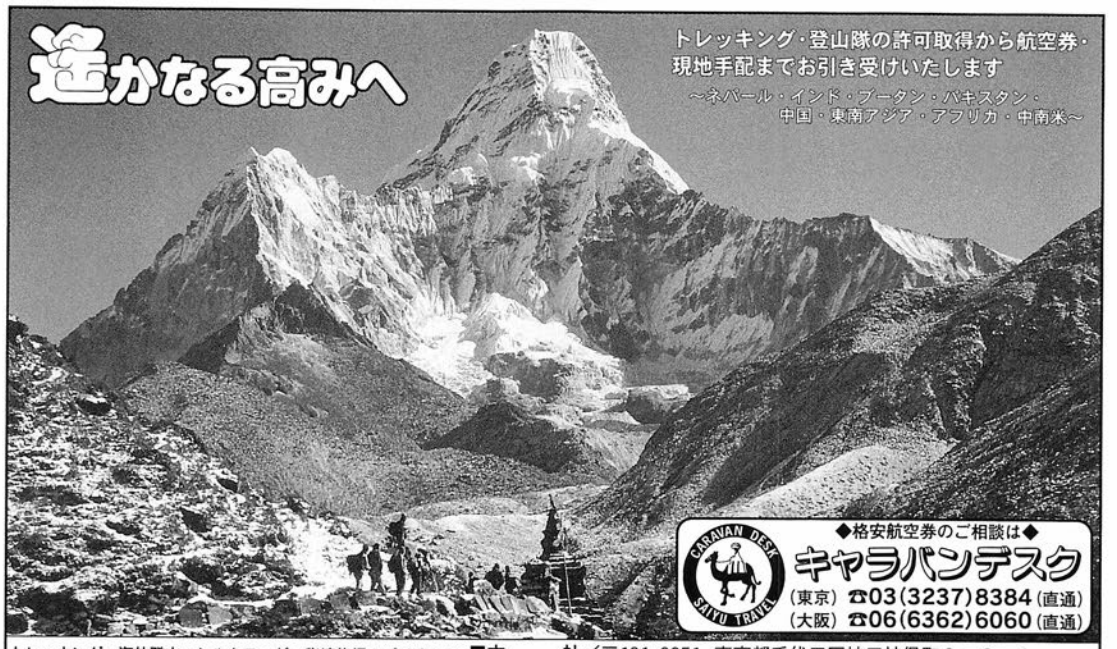
14日（土）　「イエティ捜索隊2003」の協力要請を受け、ＨＡＪ内を事務局とし協力することを受諾。山森が事務局長に就任。

28日（土）　雪標山岳会創立50周年祝賀会（於南国酒家、遠藤、酒井、山森）

30日（月）　東京集会（15名）

ヒマラヤ No.381（８月号）

平成15年７月10日印刷　　15年８月１日発行
発　行　人　山　森　欣　一
編　集　人　山　森　欣　一
発　行　所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７
萬栄ビル501号
電　話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア

株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396

■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４　北川ビル５F
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル（通話料無料）をご利用下さい。 0120－811395

東京新聞の山岳書　東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
http://www.tokyo-np.co.jp/tbook

最新クライミング技術	ジム、グレンデのフリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまで、すべてのロッククライマー必読の書。三つどころの技術を単なるマニュアルとしてではなく、その意味や、選択基準まで含めて詳しく解説。実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。	菊地 敏之 著 1600円
山小屋の主人の炉端話	著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る「人」話の取って置きのお話。	工藤 隆雄 著 1500円
チャレンジ！アルパインクライミング 北アルプス編	北アルプス全域を代表とする77のルートを分かりやすく解説したルート案内書。	廣川 健太郎 著 2500円
すぐ役立つ 山の気象と救急法	山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	飯田 睦治郎 桜井 博幸 著 1359円
すぐ役立つ 記念日の山に登ろう	人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどこに。	石井 光造 著 1300円
すぐ役立つ 山のメモ帖	「岳人」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のウンチクを深め、安全登山の指針となる一冊。	岳人編集部編 1400円
中高年の雪山入門	低山から夢のヒマラヤまで…。トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。	福島 正明 著 1600円
すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集	山での話題が登った山の数だけではつまらない。豊かな雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。	岳人編集部編 1400円
女性ガイドのしなやか登山術	常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。	樋口 英子 著 1500円
新・山靴の音	還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。	芳野 満彦 著 1262円
中高年登山なんでも百科	「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。	福島 正明 著 1500円
登山の運動生理学百科	「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。	山本 正嘉 著 2000円
山書散策	今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。	河村 正之 著 1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿１-16-７ ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町１-６-１(タキイビル２F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町３-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町３-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町１-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町５-３ ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-４ ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-１ ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手３-４-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通２-５-１ ☎025-243-6330
●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南１-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡４-１-８ ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通１-４-５ ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通１-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西４-８ ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西３-５ ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条４-１-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条１-43-９ ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3200-7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町１-４-15 ☎03-3200-1004